令和３年１２月３日発行

令和３年度学校だより　　甲府市立南西中学校

銀　杏（いちょう）

第　２５　号

学校教育目標「たくましい心と体をもち　学び合える生徒の育成」　　文責：校長　石　井　　敬

12月

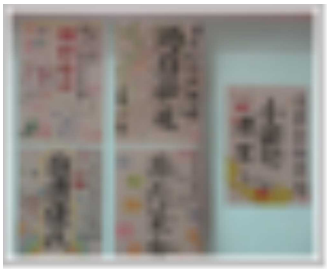
周囲の遠くの山々には雪がかかり、本格的な冬の到来を思わせる光景が広がっています。朝の寒さは日に日に厳しさを増し、登校してくる子どもたちの首もとにはマフラーや、手には手袋が目につくようになってきました。そんな登校風景の傍らを、陸上部やサッカー部の子どもたちが額にうっすらと汗をかきながら、息を弾ませて駆け抜けていきます。テニスコートからはボールを打つスパーンという爽快な音が、そして体育館からはバスケ部、バレー部、バド部の子どもたちの歓声が響いてきます。校内ではアンサンブルコンテストを控えた吹奏楽部が練習に励んでいます。そんな様子を見るにつけ、１１月中旬から再開した部活動の朝練習も軌道に乗り始めたと感じています。

一方で、社会に目を向けると“オミクロン株”という新たな変異株が出現し、未知の部分が多いだけに不安が募ります。県内での確認は認められていませんが、これを機に再びコロナの感染拡大に繋がらないことを願うのと併せ、改めて基本的な感染対策の徹底を図っていきたいものです。

また、愛知県の中学校では痛ましい事件が起こり、子どもたちを預かる身の私たちをも震撼させる出来事となりました。真相の解明にはまだまだ時間を要するようですが、関心をもって注視していくとともに、「他人事ではなくどこの学校でも起こりうる可能性がある」という危機意識を常に持ちつつ、子どもたちと相対していかなければならないという思いを強くしました。

あと３週間余りで二学期が終了となりますが、子どもたちには冬休みに入る前のこの時期を大切にさせたいと思います。ややもすると気忙しさや開放的な気持ちに流され、十分な振り返りもないままに冬休みを迎えることにもなりかねません。「冬休みに入ったら頑張る！」ではなく、３週間の中で自分自身をもう一度見つめ直し、明らかになった成果と課題を冬休みの生活に、さらには三学期に生かすことができるよう子どもたちの手助けや応援をしていきたいと思っています。三者懇談の折りにはお子さんの決意を聞いていただき、保護者の皆様にもその後押しをお願いいたします。

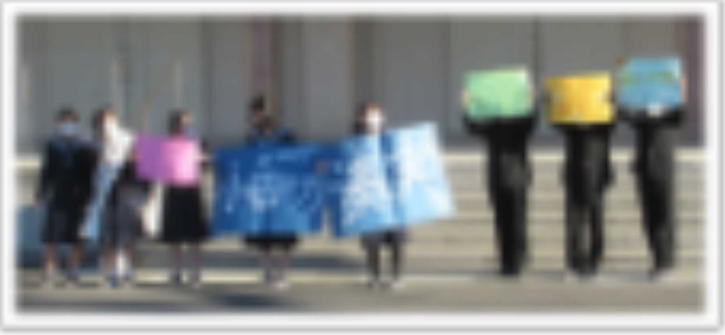
生徒会選挙に向けて２年生が始動！

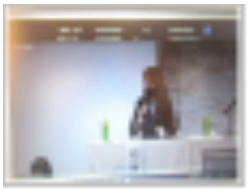


寒い中でも元気な声と言えば昨日から選挙活動が解禁となり、「おはようございます」「〇〇をよろしくお願いします」という、各候補者とそれを応援するクラスの仲間による呼びかけが前庭に響くようになりました。また、朝・帰りの会の学級訪問では、責任者が候補者の人柄や実績を、そして候補者は自身の公約を端的にまとめて訴えています。はっきりとした口調でわかりやすく自分の思いを伝えることの難しさや緊張感を察してか、聞き手も真剣に耳を傾けています。８日（水）には立会演説会と投開票が行われるので、まさに“短期決戦”ではありますが、この生徒会選挙活動を通して候補者が思い描く南西中の姿・南西中の未来を全校生徒がしっかりと受け止め、自分事として考える機会になればと願って

います。

今年度は、クロームブックを活用して各候補者がホームページを作り、そこに“南西中愛”とも言える熱い思いと、それを実現するための公約を示しています。それらに目を通してみると、いずれの候補者もこれまで築いてきた南西中の伝統と文化をしっかりと『繋承』しつつ、しかしそれだけに止まらず自分なりの味を付け加えることでさらなる『進化』と『深化』を目指していることがよくわかります。新たな一歩を踏み出す準備はしっかりとできているようです。その候補者を支え、候補者のためにポスターを描いたり、応援グッズをつくったり、たすきを書いたり、そして何よりも朝早くから応援に駆けつけたりと協力することで２年生全体が集団としての質を高めていることも頼もしい限りです。学校のリーダーになる心構えも少しずつ・・・。





先月２５日、山梨県・甲府地方気象台・地域社会ライフプラン協会が主催する『防災シンポジウム』をオンラインで視聴する機会がありました。参加のきっかけは、佐藤先生がそのパネルディスカッションでパネリストを務めると聞いたことでした。そんな軽い気持ちで参加した私でしたが、佐藤先生を始めボランティア経験が豊富な４名のパネリストのお話を聞くうちに、いざというときに頼りになるのは地域の繋がりであり、これからの地域を担う若者や経験豊富なシニア世代などが協力して自らの地域を守る力であることを強く印象づけられました。パネリストの方々は東日本大震災や広島市の豪雨土砂災害の折りにボランティアとして活動されているので、被災地でのノウハウは十分にあるものの、その地域の地理には明るくなかったり、被災した方々はいつも以上に感情のこもった言葉を発するため方言が理解できず意思の疎通が難しかったり、あるいは生活習慣が違っていたりと、県外から応援に駆けつけた災害ボランティアでは如何ともしがたい壁に何度もぶつかったそうです。その経験から得た教訓が「ボランティアがいなければ地域が回らないようにしてしまってはいけない。被災者は、同時に支援者である」ということだと言います。基調講演を含め２時間ほどのシンポジウムでしたが、いろいろと考えさせられる時間となりました。

本校には『南西中学校区青少年健全育成を願う会』があり、そこでめざす子ども像に「地域を知り、地域から学び、地域に貢献する子ども」を掲げています。過日の石田地区の地域清掃には何人もの子どもたちが参加しているのを見かけましたが、活動を通して子どもたち自身が「地域のために自分にもできることがある」、「もっと何かできることはないだろうか」という思いをもってくれたら、これほどうれしいことはありません。ボランティアの精神である“無理なく、できることを、普段から”を大切にすることで地域との繋がりが生まれ、中学生でも立派な“地域力”の一人になれることをぜひ感じてほしいと思います。

地域を笑顔にするのはあなたです。（講師：高杉“Jay”二郎氏の言葉より）